airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

日語母語話者與日語學習者的交談場合中所見之調整行為

Adjustment Behavior Seen in the Conversation between Japanese Native Speaker and Japanese Learners

doi:10.29714/TKJJ.201112.0004

淡江日本論叢, (24), 2011

作者/Author： 施信余(Hsin-Yu Shin)

頁數/Page： 73-91

出版日期/Publication Date：2011/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201112.0004

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

日語母語話者與日語學習者的交談場合中所見之調整行為

施信余
淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

至今，在社會語言學或是語言習得研究領域中，已有許多研究為了實現母語話者與學習者間協調的人際溝通，而以母語話者的分析為對象。再者，日語中有關「交涉表達涵意(negotiation of meaning)」的研究多以「完成任務」的調查方式為主，分析資料取自實際對話的研究為數甚少。因此，本研究以母語話者與學習者的交談場合為主題，討論雙方在透過視訊會議系統進行的交流當中，為了解決溝通上產生的問題，分別會採取哪些「調整策略」，而所採取的「調整策略」在對話的互動當中又會產生哪些作用，以「聯合作業」的觀點來進行分析考察。並且透過交談的對方對「要求進行調整的策略」作何反應這方面的分析考察，讓本研究得以從更宏觀的角度來掌握調整行為。

關鍵字：母語話者與學習者的交談場合　調整行為　互動　聯合作業　溝通策略

airiti

Adjustment Behavior seen in the conversation between Japanese Native Speaker and Japanese Learners

Shin, Hsin-yu
Assistant professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

In order to achieve smooth communication between native speaker and learners, there are many studies in the field of social linguistics or language acquisition set native speakers as the target while conducting analysis, so far. In addition, most of the Japanese studies which are about negotiation of meaning are mainly task-oriented. We are almost unable to find the studies which are using real conversation data as analysis material. Therefore, we took conversation between native speaker and learner as the theme, discuss which adjustment strategies will be taken in order to solve communication problems in video conferencing. And, investigating what kind of functions would arise from those adjustment strategies from the viewpoint of cooperation. We also consider the reaction to demand for adjustment strategies, for a broader perspective to know adjustment behavior.

Keywords： conversation between NS and NNS, interaction, adjustment behavior, cooperation, communication strategy

airiti

接触場面におけるコミュニケーション調整行動について
―日本語母語話者と日本語学習者による話し合いの談話資料より―

施信余
淡江大学日本語学科助理教授

要旨

接触場面において円滑なコミュニケーションの実現を目指して母語話者がとる言語行動を対象に、これまで社会言語学や言語習得研究の領域では多くの研究が進められてきた。また、今まで日本語の意味交渉研究ではタスク中心の研究が主であり、自然場面の会話からの試みはほとんどなされていない。そこで、本研究では、NS と NNS による接触場面での自然会話を取り上げ、遠隔会議システムを利用して行ったコミュニケーションにおいて、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整ストラテジーにはどのようなものがあり、それぞれの調整ストラテジーがインターアクションの中でどのように機能しているかを、NS と NNS による共同作業という視点から考察した。さらに、調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応について考察することによって、より広い範囲で調整行動を捉えることができた。

キーワード：接触場面　調整行動　インターアクション
共同作業　コミュニケーション・ストラテジー

airiti

接触場面におけるコミュニケーション調整行動について
―日本語母語話者と日本語学習者による話し合いの談話資料より―

施信余
淡江大学日本語学科助理教授

１．はじめに

接触場面とは、目標言語による母語話者と非母語話者間のインターアクション場面のことである。接触場面において円滑なコミュニケーションの実現を目指して母語話者がとる言語行動を対象として、これまで社会言語学や言語習得研究の領域において多くの研究が進められてきた。母語話者と非母語話者の接触場面において、母語話者は非母語話者とのコミュニケーションを維持するために言語ホストとして会話に参加し、非母語話者は言語ゲストとして参加するという役割関係をなしているとされてきた（ファン1999）。しかし、日本語レベルの低い者が日本語レベルの高い者に学ぶという従来の学習観の下では、母語話者と非母語話者、または日本語レベルが異なる学習者間に上下関係が生まれ、学習者一人一人の持つ無限の可能性が抑圧され、多様な学びの機会を奪ってしまう恐れがある。接触場面研究においても、母語話者対非母語話者の関係を、言語ホスト対言語ゲストという固定関係で見なす傾向を批判的にみる必要があると思われる。

母語話者と学習者の接触場面では、互いの理解を深めるために様々なやりとりが行われている。しかし、両者のやりとりに言語形式上の問題だけではなく、コミュニケーション全般に関わる問題を処理するために、「意味交渉（negotiation of meaning）」が必要となってくる。つまり、両者のインターアクションの中で行われる意味交渉こそ、接触場面のコミュニケーション問題を解決する鍵になると考えられる。

airiti

宮崎（1999a）は意味交渉の研究について、「インプットに関する実証研究が進められてきたが、こうした研究では、接触場面でのコミュニケーション問題（不適切さ）が起きた場合、どのように処理するかについての考察が不十分である」としている。そこで宮崎はコミュニケーション問題を処理するための調整モデルを提示している。さらに宮崎（2002）では、「いままでなされてきた意味交渉研究でデザインされているタスクは、自然な場面で起きる交渉を反映していない」と指摘している。

今まで、日本語の意味交渉研究ではタスク中心の研究が主であり、自然場面の会話からの試みはほとんどなされていない。日本語教育の最終目標は少なくとも、教室の中で作られているタスク活動から教室以外の会話場面でのコミュニケーションに学習者のレベルを持っていくことであろう。むしろ、自然場面での会話を通して日本語学習者と日本語母語話者の意味交渉の実態を見極めてから、日本語教育に有効な調整行動を見直すことが有効であると考えられる。また、近年、情報通信技術の発展に伴い、外国語を学ぶ学習者が空間的に離れている相手と遠隔の接触場面においてコミュニケーションすることが可能となり、実際テレビ会議システムを用いた遠隔教育を導入した教育機関も増えてきている。

そこで、本研究では、日本語母語話者（以下 NS と称する）と日本語学習者（以下 NNS と称する）による話し合い[1]の自然会話を取り上げ、遠隔会議システムを利用して行ったコミュニケーションにおいて、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整行動にはどのようなものがあり、それぞれの調整行動がインターアクションの中でどのように機能しているかを考察することを目的とする。

---

1 本研究で対象とされているのは、ある結論に達するための談話ではなく、雑談に近い談話である。

airiti

２．調整行動の定義

ネウストプニー（1997）は、調整行動を、インターアクションの中で起きた問題を解決するために行われるもので、その問題はインターアクションを支配する規範から逸脱したときに起こるものであるとしている。それに対して、本研究では、調整行動を、学習者と母語話者の意味交渉の中でコミュニケーション問題が生じた場合、それを解決するために行われるストラテジーであると定義する。ここでのコミュニケーション問題は言語形式の誤りだけではなく、円滑なコミュニケーションを妨げる意味的に理解困難なものも含む。したがって、本研究での調整行動は言語形式の誤りに対する調整だけでなく、円滑なコミュニケーションのために行うものを含めたものである。

３．研究方法

3.1　研究課題

次の二点を本研究の課題とする。

１、日本語母語話者と日本語学習者の接触場面における、調整行動の全体像を明らかにする。

２、インターアクションの観点から調整行動がコミュニケーションの中でどのように機能しているかを、調整行動に対する反応をみることによって考察する。

3.2　対象とする会話データ

分析の対象とした遠隔会議は、学生主導の遠隔会議プログラムであり、アジア四大学[2]をインターネットで結び、日常的

[2] 台湾の淡江大学、日本の早稲田大学、慶応大学、中国の北京大学の四大学である。本会議への参加は、正規授業の一環として実施する学校もあるが、淡江大学では課外活動として実施している。また、リアルタイムの遠隔交流には高度な言語能力が必要とされるため、本校は特に日本語学科高学年学生の参加を優先させた。筆者は淡江大学側の会議支援教師を担当している。

airiti

なテーマについて学生に意見交換の場を提供し、アジアの青年の相互理解を促進すると同時に、学生主体の会議運営と会議討論に必要な言語運用力を向上させることが目的である。本研究は、2009 年 10 月から 2011 年 1 月の間合計七回の日本語会議を分析対象とした。一回につき、およそ一時間である。会議の模様をすべて録音、録画し、また、会議終了後、フォローアップ・アンケートに答えてもらった。

録音された会話データの文字化は、宇佐美（2007）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2007 年 3 月 31 日改訂版」に従って行った。

文字化した発話を数量化し、定量的分析ができるように、調整行動を分類項目別にコーディングする。コーディングの信頼性は、第一認定者（筆者）と第二認定者（Second Coder）の間の判定の一致率にて判断する。その一致率を Cohen’s Kappa を用いて確認したが、Kappa=0.814 という数字が得られ、信頼できる分類項目であることが確認できた[3]。

3.3　分析項目

本研究では調整行動を表 1 のように話し手、聞き手の観点から、「調整ストラテジー」と「調整リクエスト・ストラテジー」の二つのタイプに分けた。さらに尾崎（1993）、横山（1998）、宮崎（1999b）、村上（1997）を参照し下位分類する。

[3] Cohen’s Kappa はコード化の基準、定義を決めた上で、二人のコード者が別個にデータの 5～20%にあたる量のコーディングを行い、その一致度から、偶然一致した確率を差し引いたもの。この値が 0.7 未満であれば、コード化の基準や定義に問題があると捉えて、再検討したほうがよいとされている。また、0.75 以上であれば、大変信頼性が高いとみなしてよいとされている。（宇佐美 1997：3）

airiti

表１　調整行動の分類

調整行動の視点	調整行動のタイプ	調整行動
Ⅰ． 話し手の調整行動：話し手による、自分の発話に対する調整行動	①調整ストラテジー	A　自己修正
		B　説明・具体化
	②調整リクエスト・ストラテジー	C　理解チェック
		D　間接的修正要求
		E　直接的修正要求
Ⅱ． 聞き手の調整行動：聞き手による、相手の発話に対する調整行動	③調整ストラテジー	F　他者修正
	④調整リクエスト・ストラテジー	G　反復要求
		H　明確化要求
		I　確認要求

3.3.1　話し手の調整行動

話し手の調整行動とは、話し手が自分の発話に対して調整を行ったり、調整をリクエストしたりするものである。話し手の調整行動の場合、コミュニケーション問題は話し手自身の発話の中で生じる。以下では各調整行動の定義と実例を提示する。また、提示した例文の中の下線部がそれぞれの項目にあたるものである。

①調整ストラテジー

調整行動	定義
A．自己修正	話し手が自分の発話の中で、修正を始め、終わるもの。
B．説明・具体化	話し手自身が自分の発話の中で、聞き手の理解を助けるために具体的な例や言い換えなどによって説明を加えるもの。

会話例1：[A．自己修正]（日本語で話すことについて）

NS01	こういうとき、こうやって話せばいいんだって、思った時に言えば、たぶん向こうも、相手も、伝わると思うんです。

airiti

NNS03	うん。

会話例2：[B. 説明・具体化]（外国語の勉強について）

NNS05	日本に来て、考えたんですけど、なんか、なんと言えばいいか。
NNS05	なんか、一般的に使われている言葉ですよね、英語とか中国語とか。
NNS01	ええ。

②調整リクエスト・ストラテジー

調整行動	定義
C. 理解チェック	自分の発話を相手が正しく理解しているかどうか確認するもので、「～ってわかりますか」「わかるかな」などを含む発話を指す。
D. 間接的修正要求	話し手が自分の発話の中で不確かさを感じ、言いよどんだり、繰り返したり、語尾を上げたりして、間接的に自分の発話の不適切さを表すもの。
E. 直接的修正要求	話し手が自分のわからない語彙や表現を聞き手に直接聞いて修正や確認を求めるもの。「～は何と言いますか」などの形で相手の調整を引き出すものもある。

会話例3：[C. 理解チェック]（紅葉について）

NS01	うん、あのー、紅葉、ってわかりますか。
NNS02	紅葉？
NS01	あのう、木が、あのう。

会話例4：[D. 間接的修正要求]（アジアとヨーロッパの食べ方の違いについて）

NS06	食べ方はどう違っている？
NNS02	うん、ヨーロッパでは、あのー昼ご飯も晩ご飯も、あのー、家族とか友達と一緒に、本当にゆっくり、食べて、いろいろな話をして、あのー一日中一番大切な、あのー期間？
NS06	時間？

airiti

NNS02	うん、時間。

会話例5：[E. 直接的修正要求]（「二ヶ国語」の発音について）

NNS05	また、外国語は日本語一つで十分だと思います〈笑い〉。
NNS05	また、にかげく、にかげくご、〈笑いながら〉にかげくご？、発音してください。
NS02	二ヶ国語。

3.3.2 聞き手の調整行動

聞き手の調整行動とは、相手（話し手）の発話に対して、聞き手が調整したり、相手に調整をリクエストしたりするものである。聞き手の調整行動の場合、コミュニケーション問題は相手の発話の中で生じる。以下では各調整行動の定義と実例を提示する。また、提示した例文の中の下線部がそれぞれの項目にあたるものである。

③調整ストラテジー

調整行動	定義
F. 他者修正	聞き手が話し手の発話の不適切さに気づき、修正を行うもの。聞き手が話し手に確認せずに修正を行うもので、話し手自身は修正があってはじめて自分の不適切さに気づくものが多い。

会話例6：[F. 他者修正]（日本人と台湾人の違いについて）

NNS03	それがちょっと、日本人はすごく礼儀いいんですが。
NS01	うんうん。
NNS03	なんか違いです、台湾人は。
NS01	うん、違います。
NNS03	はい。

④調整リクエスト・ストラテジー

調整行動	定義
G. 反復要求	相手の発話が聞き取れなかった時、「なに？」

airiti

	「うん？」などと、直接繰り返しを求める。
H. 明確化要求	相手の発話が聞き取れたが、理解困難な際、繰り返しや言いよどみ、または「どういう意味ですか」などの発話で、直接相手の発話に対して具体的な説明を求める。
I. 確認要求	相手の発話に対して、不明確なことがある時、自分（聞き手）の理解が正しいかどうかを、理解したとおりに表現することによって確認させる。

会話例7：[G. 反復要求]（海産物の話について）

NS04	でも、魚介類とかはおいしいんですよね。
NNS06	なに？。
NS04	魚介類。
NS04	魚とか海老とか、そういう海、海の…。

会話例8：[H. 明確化要求]（食べる虫についての話）

NS04	なんか、「ばった」ってわかります？。
NNS01	はい、え？。
NS04	「ばった」。
NNS02	「ばった」って？。
NS04	あのう、ぴょんぴょんって飛ぶ…。
NNS02	あーー、はいはい。

会話例9：[I. 確認要求]（日本人が日本語を専攻することについて）

NNS01	なんか日本語学科の学生で、日本人会ったことは、たくさんあるけど。
NS05	うん。
NNS01	いつも考えて、日本人にとって、日本語学科はなんか、やすい。
NS05	あ、やさしい？。
NNS01	やさしい。

airiti

４．分析と考察

本研究ではNSとNNSによる接触場面において、調整行動の実態とインターアクションの観点から調整行動が両者のコミュニケーションの中でどのように機能しているかを考察してきた。以下では、本研究で出された結果を次の二つの観点からまとめる。

4.1　接触場面の調整行動の実態

調整行動は大きく、「話し手の調整行動」と「聞き手の調整行動」の二つに分けられ、さらにこの二つの調整行動はそれぞれ、「調整ストラテジー」と「調整リクエスト・ストラテジー」の二つのタイプに分けられる。このように四つに分けた調整行動について次のような結果が得られた（表２を参照）。

表２　NSとNNSの調整行動の使用頻度と割合

		Ⅰ．話し手の調整行動					Ⅱ．聞き手の調整行動				合計
		①調整ストラテジー		②調整リクエスト・ストラテジー			③調整ストラテジー	④調整リクエスト・ストラテジー			
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	
		自己修正	説明・具体化	理解チェック	間接的修正要求	直接的修正要求	他者修正	反復要求	明確化要求	確認要求	
NS	頻度	11	64	7	4	4	14	11	21	222	358
	割合	3%	18%	2%	1%	1%	4%	3%	6%	62%	100%
NNS	頻度	115	41	6	32	9	0	10	29	77	319
	割合	36%	13%	2%	10%	3%	0%	3%	9%	24%	100%

airiti

調整行動の全体の頻度は、NSは総回数358回、NNSは総回数319回である。

NSの調整行動の使用割合は、高い順に［I 確認要求］→［B 説明・具体化］→［H 明確化要求］→［F 他者修正］→［A 自己修正］と［G 反復要求］→［C 理解チェック］→［D 間接的修正要求］と［E 直接的修正要求］であった。

また、NNSの調整行動の使用割合は、高い順に［A 自己修正］→［I 確認要求］→［B 説明・具体化］→［D 間接的修正要求］→［H 明確化要求］→［G 反復要求］→［E 直接的修正要求］→［C 理解チェック］であった。［F 他者修正］は本会話データでは現れなかった。

また、「調整ストラテジー」と「調整リクエスト・ストラテジー」の二つの調整行動のタイプから、NSとNNSの使用割合を比較すると図１のようになる。

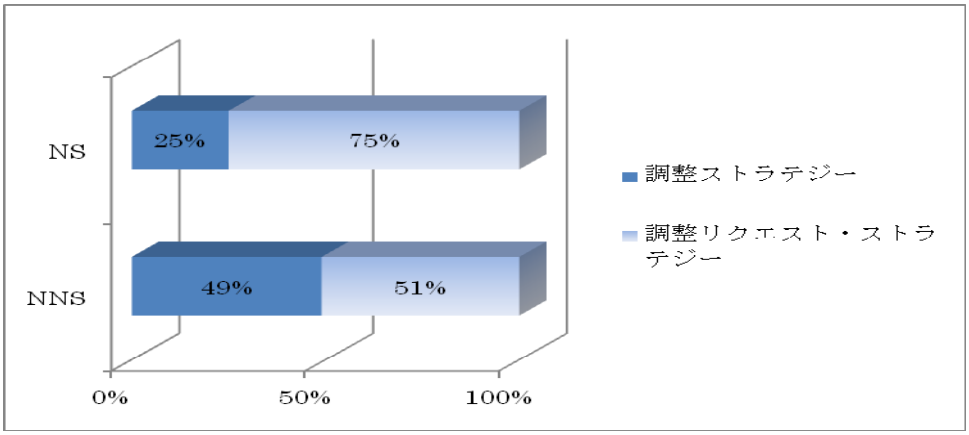

図１　NSとNNSの調整行動の割合

NSは「調整ストラテジー」が25%、「調整リクエスト・ストラテジー」が75%で、「調整リクエスト・ストラテジー」

airiti

が多かった。NNSは「調整ストラテジー」と「調整リクエスト・ストラテジー」がほぼ半々であった。つまりNSのほうがNNSより「調整リクエスト・ストラテジー」を多く使用すると言えよう。

4.2 インターアクションの観点からみた調整行動の機能

Pica et al.（1989）では、学習者と母語話者のインターアクション過程で生じたアウトプットに注目している。学習者の発話が理解困難な際、母語話者が学習者の発話の明確化を求める「明確化要求」が学習者の発話（アウトプット）の修正を引き起こしたとしている。母語話者が学習者の発話を正しく理解しているか確認する「確認要求」は数多く観察されたが、「確認要求」に対する反応は“はい”、“いいえ”などで簡単に答えるだけで済むので、学習者のアウトプットの修正を引き起こさなかったという実験結果を報告している。ところが、母語話者による「確認要求」は学習者が表現したかった、適切にできなかった表現、いわば「モデル発話」を含んでいるため、学習者にとって重要なインプットとなるとしている。

表３　調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応

調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応	
a.適切なインプットやアウトプット及び情報を提供するもの。	b.“はい”、“いいえ”、“そうですね”などのような、簡単に答え、理解を示すもの。

さて、「確認要求」の中で、学習者のアウトプットの修正を引き起こすものはどのような「確認要求」であろうか。

本研究では、調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応を表３のように分類する。さらに、NNSの反応だけではなく、NSの反応も調べることによって、両者のインターアクションの中で、調整リクエスト・ストラテジーがどのように機能しているかをみていく。

airiti

また、本研究では堀口（1997）を参考に、［I 確認要求］をさらに次の四つに分類する。

I-1 聞き取り確認要求	話し手からの情報や発話に対する聞き取りを確認するもの。
	A:「映画とか好きですか。」 B:「あっ、映画ですか。」
I-2 理解確認要求	話し手の発話に理解困難または不適切さを感じ、言い換え、先取りなどの形で、自分の理解が正しいか確認するもの。
	A:「まあ、私、編入です、編入したんです。」 B:「あ、違う大学から？。」
I-3 情報確認要求	話し手の発話に対して談話展開上、必要とされる情報や質問を加えて限定することによって確認を求めるものでる。
	A:「ちょっと難しいんですけど、こう書くんですよ。」 B:「あのー、名前がですか。」
I-4 結論確認要求	話し手の発話から聞き手が結論を引き出して提示し、その結論でよいかどうかの確認を求めるもので、「～ですよね」「～なんだ」などの形式が多く用いられる。
	A:「”すごいな”とか、なんかあのう、目が高い感じだと思ったけど、交際して一年ぐらい過ごしたら、なんか、弟になった感じ。」 B:「あー、慣れちゃうんですよね。」

「調整リクエスト・ストラテジー」に対する相手の反応を調べた結果、［H 明確化要求］は適切なインプットやアウトプットを引き起こしているものが多いという結果と、［I 確認要求］に対する反応は“はい”、“いいえ”などで簡単に答えるものが多いという結果が出た。

また、「調整リクエスト・ストラテジー」には「適切なイ

airiti

ンプットとアウトプット」、「相手への働きかけ」、「コミュニケーション促進」という三つの機能があると考えられる。「適切なインプットとアウトプット」機能を主に担っている「調整リクエスト・ストラテジー」は［G 反復要求］、［H 明確化要求］、［I-2 理解確認要求］、［D 間接的修正／確認要求］、［E 直接的修正／確認要求］であった。「相手への働きかけ」という機能を主に担っているのは［C 理解チェック］と［I-3 情報確認要求］である。「コミュニケーション促進」という機能を主に担っているのは、［I-1 聞き取り確認要求］と［I-4 結論確認要求］であった。

宮崎（1998）は意味交渉の範囲を、狭義の文法項目の不適切さから、社会言語能力や社会文化能力まで視野に入れた広い意味でのものとして扱わなければならないとしている。そこで本研究では、NSとNNSの意味交渉の中で起こる不適切さを、言語形式によるものだけに限らず、広く談話的な情報の不足によるものまで入れて考察した。その結果、上記の三つの機能を通じて、広い範囲で調整行動を捉えることができた。

５．おわりに：今後の課題

従来、NNS側のコミュニケーション・ストラテジーとNS側のフォリナー・トークについての研究のほとんどが、接触場面でのコミュニケーション問題はNNSの伝達能力不足に起因していると考えていた。NSとNNSのコミュニケーションとNS同士のコミュニケーションは性質的に異なるものである。したがって、NSとNNSの接触場面における意味交渉問題を考察するためには、両者のインターアクションの中でどのような調整行動が行われているかに重点を置くべきである。本研究ではNSとNNSの調整行動を異なるものとして扱わず、話し手と聞き手、すなわち共同作業という視点から考察した。なお、NSとNNSの「調整リクエスト・ストラテジー」に対する相手

airiti

の反応を考察することによって、より広い範囲で調整行動を捉えることができた。

その一方、宮崎（1999b）が指摘しているように、調整行動には一回限りの「単純調整」と連続した「複合調整」が存在する。本研究では、複数回に渡って調整が行われている調整行動に対する類型化や質的分析はできなかった。複合調整がどのような形で交わされているのかという点は今後の課題にしたい。

今後の接触場面研究では、形式的な意味交渉以外に、学習者が本当に発信したいことにより目を向けることが望まれる。今後は、言語や行動に注目し、原理を発見する接触場面研究から、学習者に内在する創造性を重視する接触場面研究へ転換する必要があることを提言したい。

付記

本論文は2011日本語教育学会世界大会（於：中国天　外国語大学）において口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。

参考文献

池田　子（1999）「ピア・レスポンスが可能にすること：中級学習者の場合」『世界の日本語教育』第9号、国際交流基金日本語国際センター、p.29-43.

宇佐美まゆみ（1997）「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジー研究とマルチメディア教材の試作』平成7-8年度科学研究費―基盤研究(C)(2)―研究成果報告書、p.12-26.

宇佐美まゆみ(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための

airiti

基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)（研究代表者：宇佐美まゆみ）研究成果報告書.

尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー―聞き返しの発話交換をめぐって―」『日本語教育』81号、日本語教育学会、p.19-29.

施信余（2010）「遠隔接触場面における多地点間インターアクション―台湾・日本・中国間のアクセス事例から―」『淡江日本論叢』22号、淡江大学日本語文学系、p.119-140.

ネウストプニー,J.V.（1997）「プロセスとしての習得研究」『阪大日本語研究』9、大阪大学文学部、p.1-15.

ファン,S.K.（1999）「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』Vol.2, No.1、社会言語科学会、p.37-48.

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版.

宮崎里司（1998）「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」『紀要』11、早稲田大学日本語研究教育センター、p.177-190.

宮崎里司（1999a）「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」『日本語研究と日本語教育：森田良行教授古稀記念論文集』、明治書院、p.368-380.

宮崎里司（1999b）「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン：自己マーク自己調整を中心として」『早稲田日本語研究』7号、早稲田大学国語学会、ひつじ書房、p.13-24.

宮崎里司（2002）「第二言語習得研究における意味交渉の問題」『早稲田日本語教育研究』創刊号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、p.77-89.

村上かおり（1997）「日本語母語話者の「意味交渉」にタスクの種類が及ぼす影響―母語話者と非母語話者とのインタ

airiti

ーアクションにおいて―」『第二言語としての日本語の習得研究』1号、第二言語習得研究会編集、凡人社、p.119-136.
横山紀子（1998）「言語学習におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』第8号、国際交流基金日本語国際センター、p.67-79.
Pica, T., Holiday, L., Lewis, N., & Morgenthaler, L.(1989) Comprehensible Output as an Outcome of Linguistic Demands on the Learner. Studies in Second Language Ac uisition, 11, 63-90.

2011年10月30日投稿受理　2011年12月5日審査通過